

牛乳の牛はうしであるが……

牛乳瓶には“牛乳”という漢字が書かれています。だから、生活の中で、実体に即して“ぎゅうにゅう”という言葉と“牛乳”という漢字を結び付けて教えることが容易に出来ます。

この場合、「牛乳の牛という字は、“うし”とも読め、乳という字は“ちち”とも読めるの

よ」と、つい教えたくりますが、こういう教え方は避けるべきです。“牛”は“うし”とも“ぎゅう”とも読む、などという、実在から離れた知識を、子供が求めもしないのに与えようとするから、楽しんで憶えられるものが、頭を痛めて、しかも憶えにくいものになってしまうのです。

“牛”が“うし”であることは、牛という実在に接した時、「これが“うし”という動物なのよ」言言って教えるべきものです。あわててはいけません。

また、その後生きた牛に接して、牛という漢字を教える場合でも、「この字は、前に教えてあげた“牛乳”の“牛”ですよ」などと口走ってはいけません。これも、栄養のある食べ物だからというので、子供の口に無

理に食べ物を押し込むようなものです。

それよりも、「お母さん、牛という字は、前に習った“牛乳”の牛と同じ字じゃあないの」と、子供がそれに気づいて指摘するまで待った方がよいのです。その時に、「まあ、良いところに気が付いたわねえ。忠男のことを、“ただおさん”という人もいるし、“たあちゃん”という人もいるように、同じ物にいろいろな言い方があるのよ。牛も、“うし”という言い方と“ぎゅう”という言い方と二つあるの。“牛の肉”“牛の乳”を一つにつめて言うような時には“牛肉”“牛乳”という言い方をするのよ」と教えてやりますと、子供が自ら気付いたことではあり、それを認められたことだけに、進んでこれを受け入れるものです。